

M-7. 聴覚的学習によるカテゴリ知覚の変化：健聴者と感音性難聴者の比較

○畑岸由紀子¹⁾ 平井沢子²⁾ 荒井隆行³⁾
進藤美津子²⁾

¹⁾上智大学大学院言語聴覚研究コース

²⁾上智大学言語聴覚研究センター

³⁾上智大学理工学部情報理工学科

【目的】 補聴器・人工内耳装用者の聴取りハビリを目的とし、新しい音韻特徴を既存の音韻カテゴリの枠内で学習するために語彙性がどのような影響をもつのか、閉鎖音 /t/, /d/ を用いた知覚学習を中心に検討した。

【方法】 Kraljic et al. (2006) の実験手法を一部変更し、日本語環境で追試を行った。実験参加者は成人健聴者34名、言語習得後失聴の感音性難聴者で補聴器装用者1名、人工内耳装用者1名であった。刺激音は、自然発話された /ata/ から、VOT・無音区間を一部削除して /ada/ に近似させた連続体音を使用した。参加者にはあいまいな刺激音 (tdと表記) を /t/ または /d/ のどちらに聴こえるか判定させた後、td を /d/ として聴くことで有意味語になる条件 (有意味条件) と /t/, /d/ どちらに聴いても無意味語である条件 (無意味語条件) で知覚学習をさせ、条件呈示前後の音韻判断を比較した。

【結果と考察】 健聴参加者は、有意味語条件で聴取後、td を /d/ と判断する割合が有意に高かった。また、カテゴリ知覚の変化がみられるのは音韻のカテゴリ境界付近であった。語彙性判断は td が含まれる有意味語で低くなり、語彙として知覚されにくいことがみられた。補聴器装用者は初め、td をすべて /d/ と評定し、高周波数帯域の知覚が困難であったことが推測されたが、有意味条件後に /d/ 同定率が高くなった。人工内耳装用者では語彙性条件呈示前後で知覚変化はみられなかった。

【結論】 あいまい音であっても有意味語条件で聴取すると特定の音韻と推測されやすくなる。また、あいまい音が含まれると語彙として知覚されにくいため、特に聴覚障害者があいまい音を学習するためには、文脈からも語彙知識を十分に賦活可能な工夫が必要である。

*上智大学 ORC 人間情報科学研究プロジェクトの助成を受けた。